

松井しげ女「槃草」

——翻刻と考察——

蒲生倫子

(出雲市市民文化館出雲中央図書館)

摘要

松井しげ女には享和元年（一八〇一）に作った句集「葉草」があるとされ、出雲地方の俳人や研究者によって発見を切望されてきた。実際のタイトルを「槃草」といい、女性らしい視点に満ちた句集である。

キーワード：俳諧 俳句

一 出雲千代の「葉草」

江戸時代の出雲に、加賀千代女になぞらえて「出雲千代」とも呼ばれた俳諧の能手「松井しげ」という女性がいた。

明治三十七年（一九〇四）九月発行の俳誌『草笛 第二巻第九号』に、祝羽風いわふうによる「出雲千代」と題した文章が掲載されている。これは羽風が書いたものではなく、「何人の起稿に係りしものなるやを知らざれど十余年前或書」に「記事ありたるを写し置」いたものであった。羽風は「百余年以前に我地方に斯かる女流俳家の出でしこと、亦多く世に知られざるが如し。故に再び茲に紹介」したという（『草笛』）

引用部分に濁点及び句読点を補った。以下同様。

「或書」には、しげの生涯、容姿や心ばえなどが、加賀千代女・松井しげ女の俳諧七句を折りまぜながら語られていた。記事は「其詞藻に至りては、左の葉草につきて見るべし」と続き、作品集「葉草」の序文、抜粋した二十二句で閉じられている。しげについては、次のように記している。

寛政享和の頃なりけん、神門の片ほとり常楽寺村の伊藤五左衛門といへる人の女に、しげ子といふ女俳人こそ出でたりける。しげ女、杵築の松井某に嫁し貞徳ありしが、不幸にして夙く夫に別れ、悲みにたへず自ら黒髪を剃り落して操の実をあらはし、塵事を絶ちて専ら思を俳諧に寄せ、遂に出雲千代の名を得、七十余歳

にして身没れり。国人、しげ女を出雲千代とよびしは、俳諧の道にたへなりしによりてなるべし。千代の容姿は其「一か、へあれど柳は柳かな」の句に知られ、しげ女は今猶嬋妍の聞えあり。されど其清淑に至りてはよく相似たり。千代の句に「手折らる、人にかほるや梅の花」と其心事慕ふべく、しげ女の句に「争はぬ心うつくし遅ざくら」と其心ばえ愛すべし。

しげは俳諧を良くし、艶やかで美しく、奥ゆかしい女性であった。出雲において彼女が「出雲千代」と称えられ、俳諧の才能を広く認められていたことがうかがえる。なお、寛政・享和(一七八九―一八〇一)頃に「しげ子といふ女俳人こそ出でたりける」とあるが、しげの活躍期がこの頃にあたる。

羽風は「或書」を明治三十七年の十余年前に書き写したというから、明治二十年代の初めから半ば頃ということになるうか。既に女流俳人松井しげの名は、出雲国内で忘れられつつあった。しかし彼女の評判は俳諧の才だけにとどまらない。たぐいまれなる美貌の持ちぬしであったといわれている。「或書」は「今猶嬋妍の聞えあり」という。松井しげは出雲に名だたる美人として、この書が記された明治二十年の半ば頃まで語り継がれるほどであった。

「或書」は、しげの作品も紹介している。「槃草」序文と、抜粋した二十二句である。序文を抜き出すと、

槃草(緒書)

世にさまざまの花有て、蓮は泥の中より清らかなる姿をなし、牡丹は岩の上に在てもふくくしき花のかたちをそなふ。されば、其所を多りて生ふるかと思へば、昔の人の言葉にも、植て見よ花のそだ、ぬ里もなしとやらんしたふて、いろくの花の種をひら

いて、茶園の片すみにまきちらし、洗濯の水をこぼして養ひとし、よすががある時の気のしみとなしぬ。故に、槃草と名付けはべる。

これに抜抄二十二句を続け、記事は終わっている。江戸時代(元文から文化)の出雲を生きた、魅力的な女流俳人の紹介であった。

記事が掲載された明治三十七年(二九〇四)、祝羽風は三十五歳。奈倉梧月なぐらこうげつが明治三十年(一八九七)に日本派「碧雲会」を起こすのを助け、三十六年(一九〇三)の俳誌「草笛」発刊に尽力した。

羽風の記事に素早く反応したのが、野津嘲水のつづなうすい(のちの島根県立松江図書館長。現在の島根県立図書館)だった。「草笛 第二巻第十号」に、嘲水は「歌々録」と題して、熱のこもった言葉を寄せている。

前号所載、羽風君によりて紹介せられたる出雲千代は、いかに同人の注意を惹起したであらうかは、余の信じて疑はぬ所である、果して百余年以前に於て、我雲国に如此女俳人の出でしものとせば、吾人は更に一層の研究を彼の女に向つて要すると同時に、我地方俳諧方面の歴史は尚進んで調ぶるの必要があると思ふ。

しげは明治期においても、出雲の人々を魅了したようだ。しかしながら、「草笛」は明治三十八年(一九〇五)十二月の第三巻第十二号をもって終わり、この麗しき女流俳人の残した「槃草」が見つかることはなかった。

昭和三十年(一九五五)、当時の大社町教育委員会が発行した「町誌資料編 杵築文学 第一輯」には、廣瀬信憲氏が「俳諧に寛政前後の頃女流俳人として松井千代あり、女らしいすぐれた句を残して異彩を放っているが資料不足の為次輯に譲ることとする」と書かれた。

「千代」とされてはいるが、しげが出雲俳壇における重要人物の一人

であることを認めつつ、十分な資料が見当たらずと記されている。

昭和五十六年（一九八一）に発行された『出雲俳壇の人々』において桑原視草氏もまた、「私が、松井家を訪ね、十代松井氏に聞いた限りでは、「葉草」——しげ著——、その他の資料は無いといふことであつた。（中略）彼女の「葉草」の発見されることが最も望ましい」と語られている。

このように作品「葉草」が発見を切望されつつ見つからぬ一方で、しげ自身に関する調査は進んだ。

昭和三十三年（一九五八）に大社町教育委員会が当時の大社公民館で催した「大社町女流文人顕彰展」の記念誌には、松平出羽守の家老三谷権太夫に発句を求められたという「杵築古事記」に記された逸話が、藤間亨氏・大谷従二氏によって紹介されている。三谷権太夫は使者に扇子二本を持たせて、評判のしげに発句を求めた。杵築に着いた使者はいなばや勘右衛門方に旅宿し、翌日しげの元を訪ねる。手紙を受け取ったしげは恐縮しつつも、わざわざ使者を立ててくださったものを辞退するのも失敬になるから、お送りくださった扇子を取り出してくださいという。使者が箱から扇子一本を取り出せば、しげは早速に「涼風を箱から出す扇かな」の発句を認めた。ここで使者は、扇子をもう一本取り出した。しげはそれを手に取り、封を切つて広げると、「二本目は与市も困る扇かな」と認めた。この句に感動した使者は、翌日に松江へ戻った。しげには礼の品々が送られたという。次いで、中和夫氏も昭和五十五年（一九八〇）の『大社の史話三十三号』に「近世の女流俳人 松井しげ女」を寄稿され、しげの生涯と、『草笛』に掲載のない句を紹介された。

桑原視草氏は、昭和十二年（一九三七）の『出雲俳句史』におい

ては『草笛』の記事を平易にした「松井千代」を掲載された。昭和五十六年（一九八一）の『出雲俳壇の人々』では「松井しげ」と改め、生涯を調査し直し、新たに確認されたしげの句も紹介されている。

また、昭和四十二年（一九六七）十一月三日の「島根新聞」には、俳誌「城」主宰の前田圭史氏による「出雲の千代」と題した文章が寄せられている。「大社町女流文人顕彰展」記念誌と松井家第十一代松井威彦氏の談話を参考に、しげの生涯をまとめて記されている。

これら諸研究によれば、しげは元文二年（一七三七）、出雲国神門郡常楽寺村に、二代目伊藤五左衛門の後妻の娘として生まれた。長く後世に語り継がれるほど美しく、慎ましやかな女性であつたという。杵築小土地で廻船業を営む本松井屋の三代目長右衛門（享保九年、一七二四年生）に嫁いだ。天明五年（一七八二）に夫が六十二歳で頓死すると、四十九歳で後室としての生活に入る。俳諧を始めたのは二十歳頃（宝暦六年、一七五六年頃）、越峠村の広瀬百羅ひやくらに師事して蕉風の俳諧を学んだとされ、やがて「出雲千代」と世に持て囃される女流俳人となった。当時、しげの名声は広く出雲国に知られた。

しげは文化十四年（一八一七）に八十一歳で没した。

このたび、長く所在の知れなかつた「葉草」について、書家・井原雲涯氏らによって収集された資料のひとつがそれであると確認できたため、ここに紹介する。合わせて、実際の作品名が「葉草」（たらいぐさ）であることも分かつた。なお、三谷権太夫が求めたという「涼風を箱から出す扇かな」の句は、「葉草」一七九番目に「涼しさを箱から出す扇かな」と収録されている。

二 「翻刻」 槃草

「槃草」は、書家の井原雲涯氏宅所蔵の書道關係を中心とする資料群に含まれていた。現在には出雲市立海辺の多伎図書館に寄贈され、「廻瀾亭文庫」中の一点となっている。享和元年（一八〇一）、しげ六十五歳頃の作品であり、タテ十八・八センチ×ヨコ十五・三センチの手書き本には、「正月」から「十二月」まで月ごとに区切って、四百四十八句が収められている。

翻刻にあたっては、各句の頭に新たに番号を付した。清濁は原文の通りとした。漢字は通行字体に改めた。本文には、取り消し線や塗り潰し、候補の文字を並べて記すなど、作者しげによる推敲の跡が多く見られる。見え消しは翻刻の対象とし、二重線を用いて削除されていることを示した。塗り潰しによる削除は翻刻の対象から外した。奉納に用いた五句（四六、三四八、三七九、三八七、四一四）について、しげは句の上にその旨を書き込んでいるが、ここでは句の横に記した。各句の下の「○」「●」などの印は原本にあり、しげによる何らかの分類を示すものと思われる。

槃草

世にさま／＼の花有て蓮は泥の中より清らかなる姿をなし牡丹は岩のうへに在てもゆたかなる花のかたちをそなへされは其所をゑりて生るかと思へは昔の人の言草にも植て見よ花の生立ぬさともなしとやらんをしたふていろ／＼の花の種をひらいて茶園の片すみにまきちらし洗濯の水をこほして養ひとしよすかある時のたのしみとなしぬ故に槃草

と名付侍る

正月

- 一 元日やうつくしき物人こゝろ ○
- 二 元日や蓬萊の山よ所ならず
- 三 元日やきのふの事もふるめかし
- 四 元日や遊ふつれにはまたならず
- 五 こそ物みな新しやけさのはる ○
- 六 齒かため的心恥かし老のはる ○
- 七 用いふて来る人もなしけふの春 ○
- 八 くもりなき心をうつ世か、みもち ○
- 九 うらなきをうき世の人のか、みもち ○
- 一〇 はるもけふ目に見へそむる霞かな ○
- 一一 本宅へ移られし ○
- 一二 門の戸をひらけはすくに恵方哉 ○
- 一三 今朝見れはかさりはらとて美しき ○
- 一四 ふくはらやちりあくたとは思はれす ○
- 一五 なからへて孫か手ぬひの着衣はしめ ○
- 一六 苔のむす岩にあやかれきそはしめ ○
- 一七 かけ鯛もお手に覚への恵美須棚 ○
- 一八 若水やけさのけはひの手にぬるみ ○
- 一九 はるけしきたつや八雲のうす霞 ○
- 二〇 世はありのまゝかよいやら雑煎箸 ○
- 二一 春たつやかさらぬ竹もおきなをり ○
- 二二 おさかりやはしめてゆるき傘の音 ●

しげ

二二	初ゆあみ我身なからも清らかさ						
二三	見わたせは永き日数や初こよみ	○	、	四七	吹風もめにうつくしき柳哉		●
二四	羽子つくや空ものとけき鳥の声	、		四八	地にとくあまりは川へ柳哉		●
二五	破魔弓やあたりくは乳母かこゑ			四九	青柳のいつれ男木とはおもはれず		●
二六	万歳や下手もめてたふ舞納			五〇	花に降る雨も又よき柳哉		●
二七	縫そめやちいさき手には雛の御衣	●		五一	身をは世のあるにまかせて柳哉		●
二八	常にさへめて度かしく筆はしめ			五二	鶯やいかにも冬の声ならず		●
二九	うつくしき手もたのまれす筆初	○		五三	とちきかん谷の鶯さしむかふ		●
三〇	大黒舞物もらいとはおもはれす	○		五四	鶯や糊かひ物の竿になく		●
三一	松引に来て梅までも子の日哉	○		五五	鶯に恥てや松の声もせず		●
三二	同じ野にめてたからる、若菜哉	●		五六	佐保姫の霞の袖も手織哉		●
三三	つま紅の雪にうつるや若菜摘	、		五七	藪入やくしけもとらぬ気のゆるみ		●
三四	袖ふるひくつむわかなかな	、		五八	鶯の声もとかしきさむさかな		●
三五	七種や恵方まいりの道すから	○		五九	また寒しとふからはるになりながら		●
三六	売に来て音をはる籠の鶯菜			六〇	梅か、をつ、みかねたる霞哉		●
三七	其泥にそまぬ根芹も心から				二月		●
三八	野にさへもふさかしうとめよめ水哉	○		六一	花の香の何所からもる、朧月		●
三九	谷水のをとも東風吹風につれ	○		六二	母の文二日やいと事までも		●
四〇	梅か花風のたよりにもちあるき	○		六三	出し跡もまた気か、りやへひの穴		●
四一	雪間よりみゆるも白し梅の花			六四	かほかくす心にも似ぬきし声		●
四二	折袖に散るは雪なり梅の花	●		六五	聞なれて子はおとろかす雉子の声		●
四三	梅か、や一木なからも野にあまり	●		六六	かくれても我こゑつらきき、す哉		●
四四	折て見よ雪はかほらす梅の花			六七	やうもく思ひきつたるきし声		●
四五	また明ぬ窓もる梅のにほひ哉	○		六八	美しく生れ付てもきし声		●
四六	此分覆やくし奉納に出す	○		六九	巢の留守は人にあつて燕かな		●

一六七	ぬき捨しきぬさへへひのおそろしき		一九〇	やり水の音も涼しき闇夜かな	○
一六八	恋にさへまよはぬみちを五月闇		中		
一六九	子を思ふ道の外にも五月闇		二〇一	蓮いけやよもすから闇雨のをと	○
一七〇	五月闇それさへあるにぬかり道	○	二〇二	昼かほやしほれた草の中に咲	●
一七一	早乙女や内には老のいそかしき	○	二〇三	昼かほのつれなくみゆる盛哉	○
一七二	五月雨の垣に色つくいちこ哉	○	二〇四	夕顔や何所に植てもはなは花	○
一七三	五月雨は晴てあふちの花くもり	○	二〇五	草も木も紅葉するまでか百日紅	○
一七四	夕かほの花にはつらき蚊やり哉	●	二〇六	草の葉の露ともきえず蟬のから	●
一七五	石山の闇も又よし飛ほたる	○	二〇七	火に入も身のよからよ夏のむし	○
一七六	橋姫の思ひの玉かとふほたる	●	二〇八	見る人の身の毛もよたつ毛虫哉	○
六月			二〇九	蚤に又かやの内さへ安からず	○
一七七	闇にさへ出る気て居るに夏の月	○	二一〇	打水や枝の蛙のうれし鳴	○
一七八	微 <small>なみ</small> の香に留木のかさや土用干	○	二一一	夏やせや物思ふかとはつかしき	○
一七九	涼しさを箱から出す扇哉	○	二一二	日黒みやしほくむ海士のつくも髪	●
一八〇	おもはゆき時の用にも扇哉	○	二一三	帷子にすきて涼しや雪の肌	○
一八一	おしろひの匂ひはむかし汗拭	○			
一八二	夕立や暑さなかる、川のをと	○			
一八三	夕立やよ所の空には雲もなし	●			
一八四	川社神も涼しくおほすらん	○			
一八五	扇より手になれ安きうちわ哉	○			
一八六	蚊をたゝくをとも折くうちわ哉	○			
一八七	たのみたる森も夕日の暑かな	●			
一八八	みち草のあつき匂ひや道すから	○			
一八九	明安き夜もむりならずねふの花	○			

二六三 いと、さへ露けき袖にきり／＼す
 二六四 草の戸を明てまつむしたれも来す
 二六五 いつしかに夜は明かたやむしのこゑ
 二六六 蝶よりも花にうつくし赤とんぼ
 二六七 すゝむしの声もたふとし神の垣
 二六八 暑かりし事を思へは秋もよし
 八月
 二六九 月かなし姥捨山は遠けれと
 二七〇 十六夜の闇にたすほと三日の月
 二七一 むすふとも水なにしそ月の影
 二七二 名月や今宵ふるかとひらの雪
 二七三 名月や夕日にかはる勢田のはし
 二七四 名月やむかふ心のはつかしき
 二七五 名月や橋をのそけは下り鮎
 二七六 名月や色つきそむる山もけふ
 二七七 名月やかゝみの内に居る心
 二七八 名月や石山に聞三井のかね
 二七九 名月や霜に更行かねの声
 二八〇 一よさはいつくも月の名所かな
 二八一 黒ふても松はまつなりけふの月
 二八二 白かへも常には白しけふの月
 二八三 わさと見にゆかぬ人にもけふの月
 二八四 みち／＼てかけぬ内にと月見哉
 二八五 散る葉までせわのうき世や龍田姫
 二八六 此中のいつれを折らん花野哉

二八七 いろ／＼の香にきゝとれて花野かな
 二八八 まねかれてよればあちむく尾花哉
 二八九 心からまねくてもなきを花哉
 二九〇 朝露に濡てを花もしつかなり
 手おらるゝ人なうらみそ暮のはな
 二九一 嫁菜さへ今は野菊のこゝろまゝ
 二九二 鶏頭やとちらを花のうらおもて
 二九三 鶏頭や咲そめしより花ひとつ
 二九四 幾朝の霜につれなや種ふくへ
 二九五 笑ふなよ美しき花の種ふくへ
 二九六 うつくしき花から出しふくへ哉
 二九七 さひしきは寝てすませとも礎哉
 二九八 いろ／＼の虫打けしてきぬた哉
 二九九 淋しさに出れば門田の鳴の声
 三〇〇 初雁や風もそろ／＼秋の声
 三〇一 初雁や風のたよりにおもひ立
 三〇二 色鳥や枯木の枝もうつくしき
 三〇三 落鮎やそふてなかるゝ柳の葉
 三〇四 落鮎ややつれはてたる身のあはれ
 三〇五 其声を夏には鴟の鳴もせず
 三〇六 柳にも持あましたる野分哉
 三〇七 おれ枝を地にもおとさぬ野分哉
 三〇八 笛の音によるもやさしやしかの声
 三〇九 あはれなる秋の中にもしかの声
 三一〇 吹おくる風かはれかししかの声

四〇四 大社十二景御崎山の雪

月にさへ明ぬ障子を雪のみね

四二六 年忘れあすはくにくれにけり

四二七 おとこさへまかせぬ物を年忘れ

四〇五 手ならゐの手によこしけり雪こかし

四二八 女子さへこゆるは安しとの坂

四〇六 つめたさを身のならはしの雪こかし

四二九 こちへこす人にはあわすとの関

四〇七 笹の葉をさかす音してあられ哉

四三〇 年の関鶏のそら音もはかられす

四〇八 傘さゆる物とは見へぬあられ哉

四三一 冬の梅ひとり野中にかほりけり

四〇九 水くみに来てたゝもとる氷かな

四三二 梅の雪きえてうれしや寒の雨

四一〇 下駄はきて行なやみたる氷哉

四三三 寒声やさむさおほゆる戻り道

四一一 折くゝのあかりせはしきしくれかな

四三四 行年もとしくはやくおもはるゝ

四一二 添ふてふる柳はもとるしくれ哉

四三五 行年をいそくや老もかへり見す

四一三 残りある空とは見へぬしくれ哉

四三六 行年に関のこなたて別けり

四一四 此分多の木やくし奉納

四三七 行としやいつもなからにおとろかれ

雪女さはらはさえん風情なり

四三八 行としや身につもるとはおほへねと

四一五 殿様はいつれの笠ぞ御鷹狩

四三九 うしと見し世もなつかしや年の暮

四一六 御神楽や明ぬに衛士の顔白し

四四〇 知れてある事に聞し年の暮

四一七 御神楽に霜夜の笛の遠音哉

四四一 今さらにおしむ気になる年暮

四一八 水仙の葉さへ花さへさむけなり

四四二 一とせもいと、みちかし老のくれ

十二月

四一九 うつかりと思ふて居れば節季哉

四四三 待事もなき身なからもとしのくれ

四二〇 すゝはきにこなたの神も御ゆき哉

四四四 もとかしのまゐらせ候やとしのくれ

四二一 常の間へ直るも清しすゝの雪

四四五 長かれと思ふもよくよとしのくれ

四二二 おしからぬ物となりたり古こよみ

四四六 いくとも俄に年はくれねとも

四二三 くり返すねんも残らす古こよみ

四四七 くれかねし昔なつかし年の末

四二四 此中に遊ぶ日もあり年忘れ

四四八 扇置袖に来鳴やきりくす

四二五 女子とし思ふてくるゝとしわすれ

三 『草笛』と『槃草』

祝羽風が『草笛』に掲載したのは、「十余年前或書」に見た、松井しげの略歴及び「葉草」なる作品の緒書と抜抄二十二句であった。この『草笛』掲載以降、長く作品名は「葉草」とされた。「或書」を記した人物は、「槃草」に収録されていない句を用いて、しげの生涯を表現している。書名を「葉草」にしているから、しげと対面したことはないが、彼女の生涯をよく調べ或いはよく知り、「槃草」を手にした人物であったと考えられる。

『草笛』掲載の序文及び二十二句の内、二四、二七、三一一、四一五、四二〇の五句に着目したい。『草笛』と廻瀾亭文庫本「槃草」との間に表記の違いが見られる五句である。比較しやすいよう、いずれも濁点及び句読点を原本のままにした。

・序

「草笛」世にさまざまの花有て蓮は泥の中より清らかなる姿をなし牡丹は岩の上に在てもふく／＼しき花のかたちをそなふされは其所をゑりて生ふるかと思へは昔の人の言葉にも植て見よ花のそた、ぬ里もなしとやらんしたふていろ／＼の花の種をひらいて茶園の片すみにまきちらし洗濯の水をこぼして養ひとしよすかある時の気のみとなしぬ故に葉草と名付けはへる

「槃草」世にさまざまの花有て蓮は泥の中より清らかなる姿をなし牡丹は岩のうへに在てもゆたかな花のかたちをそなへされは其所をゑりて生るかと思へは昔の人の言葉にも植て見よ花の生立ぬさともなしとやらんをした

ふていろ／＼の花の種をひらいて茶園の片すみにまきちらし洗濯の水をこぼして養ひとしよすかある時のたのみとなしぬ故に槃草と名付侍る

・二四

「草笛」羽子つくや空にのとけき鳥の声

「槃草」羽子つくや空ものときき鳥の声

・二七

「草笛」縫そめやちいさき手には雛の衣

「槃草」縫そめやちいさき手には雛の御衣

・三一一

「草笛」引く綱に蜻蛉のそれる鳴子かな

「槃草」引つなに蜻蛉もそれる鳴子哉

・四一五

「草笛」殿様はいつれの笠に御鷹狩

「槃草」殿様はいつれの笠ぞ御鷹狩

・四二〇

「草笛」煤掃にこなたの神の御幸かな

「槃草」す、はきにこなたの神も御ゆき哉

このように、『草笛』と廻瀾亭文庫本「槃草」の表記には違いが見られる。ところで、

・廻瀾亭文庫本以外、完全な形で確認された本がないこと

・「或書」に、出版や版元に関する情報が書かれていないこと

・長く「葉草」として読み下され、伝わっていたこと

以上のことから、「或書」で使用された底本は、廻瀾亭文庫本と同じく書写本であったといえる。「或書」を書いた人物または祝羽風が表記を変えたとも考えられるから、同一本の可能性もある。

四 しげによる組分け

「槃草」には、正月六十句、二月四十五句、三月二十七句、四

月二十九句、五月十五句、六月三十七句、七月五十五句、八月五十三句、九月三十七句、十月四十五句、十一月十五句、十二月二十九句に、追加一句を加えて、計四百四十八句が収められている。これらの句の中には、作者しげによって印が付けられているものがある。それらは、次のように十のグループに分けられる。

- **正月** 一、六、八、一二、一七、一八、一九、二〇、二二、二九、三〇、三一、三五、三八、四〇、四五 **二月** 七〇、七九、八〇、八四、九一、九二 **三月** 一二二、一一六、一二六、一三二 **四月** 一三三、一三四、一四〇、一五〇、一五三、一五五 **五月** 一六二、一六五、一七〇、一七二、一七五 **六月** 一七七、一七八、一七九、一八二、一八四、一八五、一八九、一九〇、一九一、一九四、一九八、二〇三、二〇七、二一〇 **七月** 二二四、二二三、二二三、二三〇、二三一、二三二、二三八、二四〇、二四二、二四五、二四七、二五二、二五五、二五六、二五八、二六一、二六二、二六三 **八月** 二八〇、二八八、二九一、二九二、二九四、二九六、三〇〇、三〇二、三二五、三三〇 **九月** 三三三、三三五、三三九、三三九、三四七、三四八、三四九、三五三、三五四 **十月** 三六三、三六五、三七二、三七五、三八四、三九一 **十一月** 四二二 **十二月** 四一九、四二〇、四二四、四二六、四三三、四三九、四四五
- **正月** 二二、二七、三三、四二、四三、四六、四八、四九、五二、五七、五八 **二月** 六三、六九、八八、八九、九〇、九三、九五、九六 **三月** 一〇七、一一一、一二二 **四月** 一三五、一三八、一四四、一五一、一五六、一五八

- **五月** 一六四、一七四、一七六 **六月** 一八三、一八七、一九二、一九七、二〇一、二〇二、二〇六、二一三
 - **七月** 二二六、二一九、二二一、二五七、二五九
 - **八月** 二六九、二七二、二七三、二七八、二九〇、三〇六、三一、三二四 **九月** 三三四、三三八、三三五、三五五
 - **十月** 三五九、三六〇、三六二、三七三、三七六、三七七、三七八、三八〇、三八二、三八七、三九五、三九六、三九八、四〇〇 **十一月** 四〇四、四〇七、四〇八、四〇九、四一四、四一五 **十二月** 四二七、四三二、四三二、四四〇
 - **正月** 一〇、一五、一六、二二、二四、三三、三四、四七、六〇 **二月** 六一 **六月** 二二九 **十一月** 四〇五、四一〇 **十二月** 四二八、四二九
 - **二月** 七一 **四月** 一四一 **八月** 三二二 **十二月** 四三六、四四七
 - **六月** 二〇八 **七月** 二二〇、二三五、二三八、二四一
 - **九月** 三四〇、三四一、三四二、三五〇、三五二
 - **十月** 三六九、三八一、三九七 **十一月** 四一六、四一七、四一八 **十二月** 四二一、四三二、四三七、四四二
 - **二月** 六二、七五、九八、一〇〇、一〇二 **三月** 一〇六、一一〇、一一九、一二〇、一二七 **四月** 一四五、一五七、一六〇 **五月** 一六七、一六八
 - **二月** 一〇三 **三月** 一三〇 **四月** 一四六
 - **三月** 一二四 **四月** 一四二、一四七、一四八、一五四
 - **三月** 一二七 **四月** 一四三
- 以上、「○」百二句、「●」八十句、「、」十五句、「・」五句、

「」二十句、「一」十五句、「Ⅱ」三句、「○」五句、「●」二句、九種の印がしげによって付された。残る二百一句の「印無し」を加え、十グループに分けられる。

全ての月から句を選出した「○」及び「●」グループは、小作品集にもなり得る。しかし他のグループは、一部の月に偏った収集となっている。

『草笛』掲載の抜抄二十二句は、一七〇「○」、一八〇「○」、二三〇「○」、二四〇「○」、二七〇「●」、六二〇「一」、九七〇「印無し」、一三五〇「●」、一七二〇「○」、一九〇〇「○」、三二〇〇「●」、三三三〇「●」、三三八〇「印無し」、三五二〇「○」、三六一〇「印無し」、三九一〇「○」、四一〇〇「○」、四一五〇「●」、四二七〇「○」、四三〇〇「○」、四三三〇「●」、四三三二〇「○」であり、特定のグループから抜き出されたものではない。「或書」を記した「何人」による選であろう。

また、桑原視草氏は『出雲俳壇の人々』の中で、いはさき久良子著『しきしまの道』に掲載されたというしげの俳諧七十三句から、二十三句を選んで紹介された。「槃草」に見られるのは、この内の二十二句である。七五〇「一」、一三二〇「●」、一三二四〇「○」、一四六〇「Ⅱ」、一五二〇「●」、一五七〇「一」、一六九〇「印無し」、一七四〇「●」、一九二〇「●」、二五二〇「○」、二五三〇「印無し」、二五七〇「●」、二六九〇「●」、二七一〇「印無し」、二七四〇「印無し」、三二一〇「○」、三二二三〇「○」、三六八〇「印無し」、三七二〇「○」、三八〇〇「●」、三八二〇「●」、四一八〇「」であり、これも特定のグループから抜き出されたものではない。

印を分けるにあたり、例えば「○」と「●」、「○」と「」など、筆の流れや墨の具合によって、判別し難いものも多く見られた。中で

も「」とした三四〇・三四一・三四二・三四三・三四四・三四五・三四六は、「○」の可能性も高い。このように、しげの意に沿わないグループに入れたものもあるが、できるだけ意図を汲み取るよう努めた。印は近くに書かれたものほど、形や大きさがよく似ている。しげが句の出来栄えについて、こまめに吟味したものと考えられる。

五 しげの句

祝羽風は『草笛』中で、しげの句を「婉柔謙遜、所謂句作の強からざる処に女性特得の趣味を發揮して、誦すべきもの少からず」と評している。羽風の目にした句が対象であり、先に述べた抜抄二十二句と、しげの生涯を語るために用いられた句（全七句の内、五句がしげの作と「或書」は記す）がそれにあたる。ここに「槃草」に収められた残りの四百二十六句を加えても、当時の女性の視点で生活や心情を語る様子は変わらない。しげの慎ましやかな喜怒哀楽、細やかな気づきが見えてくる。

中和夫氏の研究によれば、しげは蕉風の詠み手であった。同氏は前掲「近世の女流俳人 松井しげ女」において「しげ女は俳諧を当時越峠村（現在大社町元町）に住んでいた学者で俳人として名高い広瀬百蘿（一七三二〜一八〇三）に師事して蕉風の俳諧を学んだ」と述べられている。

一九一「二つには闇の涼みもこゝろまゝ、」は「皿鉢もほのかに闇の宵涼み」（其便）から着想を得たものであろう。また、三三三「つま紅の雪にうつるや若菜摘」は「わぎも子が瓜紅粉のこす雪まるげ」（猿蓑集）を、一七〇「五月闇それさへあるにぬかり道」は「笠島はいづ

こさ月のぬかり道」(おくのほそ道)を、二六一「牛部やに何を鳴らんつくはむし」は「牛部屋に蚊の声くらき残暑哉」(蕉翁句集)「牛部屋に蚊の声よはし秋の風」(蕉翁句集)を、それぞれ意識したものと考えられる。三八七「おとこ気も事にこそよれふくと汁」、三八八「命より名こりおしけれふくと汁」、三八九「人なみにくはぬもいか、ふくと汁」、三九〇「葉くひする気にも似すふくと汁」の四句に見られる「ふくと汁」は「あら何ともなやきのふは過てふくと汁」(江戸三吟)から得たものであろう。

また、しげ自身は加賀千代女を意識しており、着想から言葉の使い方まで、千代女の句を思い起こさせるものが見られる。

ところで、四六「風ならてたれかあくへき柳髪」は、「くらべこし振分髪も肩すぎぬ君ならずして誰かあくべき」(伊勢物語)の本歌取りであるが、『毛吹草』の「追加 上」に見られる石田未得の「風ならて誰かあくへき柳髪」と一致している。豪商松井家で隠居生活を送るしげが俳諧を学ぶにあたり、江戸初期に刊行された作法書「毛吹草」を読んだことは十分に考えられる。しかし一方で、しげは多くの書物に親しみ、本歌取りや引用を楽しんだ。例えば、一五「苔のむす岩にあやかれきそはしめ」は「わが君は千世にやちよにさざれいしはいはほとなりてこけのむすまで」(古今和歌集)を、一六九「子を思ふ道の外にも五月闇」は「人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」(後撰和歌集)を、それぞれ本歌取りしたものである。四三〇「年の関鶏のそら音もはかられず」は「夜をこめて鳥のそらねははかるとも世にあふさかの関はゆるさじ」(枕草子)を本歌取りしている。一三〇「松の藤あさのよもきに恥よかし」は「蓬生麻中、不扶而直」(荀子)を、二七三「名月や夕日にかはる勢田のは

し」や二七八「名月や石山に聞三井のかね」は「近江八景」からそれぞれ「勢多夕照」「三井晚鐘」を題材に用いている。こうしてみると、四六「風ならてたれかあくへき柳髪」もまた、女性らしい視点で句作に取り組むしげが、「伊勢物語」に着想を得たことで生まれたものであろう。しげはこの句を榎葉師に奉納したと記録している。

廻瀾亭文庫本「槃草」には推敲の跡が多く見られるが、単純に下書きのつもりで書かれたとはいえない、一作品集としての丁寧さ、気を抜かぬ作りとなっている。この本は全ての頁にわたり、六行(六句)を基準に、最後まで丁寧な文字で書かれている。六句以上記されている頁もあるが、行間を利用して新たに句を追加したためである。上下と行間に余裕をもたせることで、推敲や追加など、後に書き込みやすく作られている。しげの、細やかで良く気がつく女性であった様子がかがえる。

松井しげ女の名は出雲において、俳諧の才能によっても、その美貌によっても、広く知られていたとされる。また、活字化された状態であったとはいえず、廻瀾亭文庫本と『草笛』で紹介された「或書」とには表記の違いが見られる。「槃草」が書き写され、別本が存在する可能性も高い。今後の発見に期待したい。

「付記」本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域文学関係資料の研究」(代表・野本瑠美)の成果の一部である。翻刻にお力添えをいただいた島根大学文学部田中則雄教授、「槃草」を収集し現在まで残してくださった井原雲涯先生と関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

【引用及び参考文献】

- 【史料】*「槃草」（出雲市立海辺の多伎図書館廻瀾亭文庫蔵）【書籍】*
『草笛 第二卷第九号』（明治三十七年、草笛発行所、島根県立図書館蔵）
*『草笛 第二卷第十号』（明治三十七年、草笛発行所、島根県立図書館蔵）
『出雲俳句史』（昭和十二年、桑原一雄）『出雲俳壇の人々』（昭和五十六年、だるま堂書店）*『大社の史話 三十三号』（昭和五十五年、大社史話会）*『影印本元禄版おくのほそ道』（昭和五十五年、勉誠社）*『影印本元禄版猿蓑』（平成五年、新典社）*『新編国歌大観 第一卷 勅撰集編 歌集』（昭和五十八年、角川書店）*『新編国歌大観 第五卷 歌合編 歌集』（昭和六十二年、角川書店）*『毛吹草』（一九四三年、新村出校閲、岩波文庫）*『日本古典文学大系45 芭蕉句集』（昭和三十七年、岩波書店）*『新釈漢文大系5 荀子 上』（昭和四十一年、明治書院）【その他】*「町誌資料編 杵築文学 第一輯」（昭和三十年、大社町教育委員会）*「大社町女流文人顕彰展記念誌」（昭和三十三年、大社町教育委員会）*「島根新聞 昭和四十二年十一月三日」

A Reprint and A Study of Matsui Shige-jo's "Tarai-gusa".

GAMO Noriko

(Izumo City Hall People's culture part Izumo Chuo Library)

[Abstract]

Matsui Shige-jo's "Shiori-gusa" was written in 1801, The discovery has been desired earnestly by a haiku poet and the researcher of the Izumo district. The true title is "Tarai-gusa", It is a collection of haiku poems full of feminine viewpoints.

Keyword : Haikai, Haiku